

平成 30 年度 第 3 回小松市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成 31 年 3 月 25 日 (月)
開会 13 時 30 分 閉会 14 時 40 分

2 会 場 小松市役所 3 階 3B 応接室

3 出席者 小松市長 和田 慎司 (議長)

小松市教育委員会

教 育 長 石黒 和彦
委 員 北村 嘉章
委 員 吉原 慎吾
委 員 中惣 恭子
委 員 勝木 克子

(事務局関係)

総合政策部長	越田 幸宏
総合政策部 国際&経営政策課長	藤井 勝司
総合政策部 国際&経営政策課担当課長	中野 芳美
総合政策部 国際&経営政策課事務員	嶋田 裕介
教育委員会事務局 教育次長	道端 祐一郎
教育委員会事務局 未来の教育課長	中谷 光恵
教育委員会事務局 教育庶務課長	三ツ橋 薫
教育委員会事務局 学校教育課長	吉田 明生
教育委員会事務局 学校教育課指導主事(参事(総括))	新名 孝
教育委員会事務局 学校教育課指導主事	川江 麻美
教育委員会事務局 青少年育成課長	松野 真弓

4 討議事項 ・ 2019 年度小松市教育委員会教育設計

5 会議の経過及び発言

○開 会

○和田市長あいさつ

- ・あと 1 週間で新たな元号が発表され、5 月から新しい元号が始まる。また、2019 年、2020 年はスポーツで世界的に大きなイベントもあり、それらを活用した教育の展開をお願いしたい。教育委員の方々にも、これからの「国際都市こまつ」へ向けたご意見をお願いしたい。

○討議事項

・2019年度小松市教育委員会教育設計

<事務局>

【教育設計における背景及び育成の成果について】

- ・学習指導要領が改訂される時期を迎える。その背景は、世の中のグローバル化や絶え間ない技術革新により予測困難な時代を迎えることとされている。そのような中、子どもたちに求められる力として、「他者と協働して課題を解決する力」や「情報を見極め、新しいものを創っていく力」等が必要とされている。
- ・各学校における「育成を目指す資質・能力」として国から、①学びに向かう力・人間性等 ②知識・技能 ③思考力・判断力・表現力等 が示されている。
- ・それを受けての取組や成果としては、①中学生サミット ②ボランティアマインドの育成（安宅海岸清掃等）③全国学力学習状況調査における達成率の高い児童の割合の上昇（年度比較）④全国体力・運動能力調査結果において、小・中学校ともに全種目において全国平均を上回る が挙げられる。

<議長>

- ・全国学力学習状況調査については、児童単位での比較は難しい。
- ・全国体力・運動能力調査結果については、瞬発力重視であるが、持久力も大事。分析の際は注意が必要。

<事務局>

【現状と課題について（教員）】

- ・働き方改革について、80時間以上勤務者は昨年より減少。教材の共有や分担の見直しにより平準化できてきている。
- ・教員の年齢別比率を見ると、ベテランである50代の教員があと数年で退職することが予想される。この層の持っている指導力やノウハウを次の世代に繋げることが課題である。

<議長>

- ・教員の年齢別比率については、50代の割合も下がってきている。ある程度平準化されたのではないか。民間企業も同様の傾向。

<事務局>

【現状と課題について（児童生徒）】

- ・不登校児童生徒数は、全国的に増加傾向。本市では増加を食い止めている。魅力ある学校づくりを進め、不登校児を増やさないとともに、訪問相談により、現在不登校である児童生徒のケアに取り組んでいる。
- ・外国人児童生徒の増加も大きな課題。今後、日本語センターを立ち上げ、日本の学校に慣れる期間を設け、より良い教育環境を整えていく。

【2019改善の視点について】

- ・現状・成果を踏まえ、①S（学習）：求められる資質・能力の育成 ②M（道徳性）：ルールを守る意識 他を思いやる心 多様性の理解 ③W（意欲）：挑む力 を視点

として設ける。

〈事務局〉

【全体的な教育コンセプトについて】

- ・全体的な教育のコンセプトとして、①SDGs の実践に努める ②児童生徒の学びの力を高める ③関係機関との連携を通して教育の質の向上を図る ④教育の質の向上の視点から「働き方改革」を捉える ⑤体験活動、自治的活動、交流の場等を通して、自分とは違う見方、考え方を認め尊重する機会を設定する ⑥オリパラ教育を展開し、道徳性、ボランティアマインドの育成に努める ⑦児童生徒の安全に関わる責任を果たす を考えている

【小松市の教育委員会の考え方について】

- ・子どもたちに求められるものとして、取り組みの意欲、思考力、知識・技能、コミュニケーション力、判断力が挙げられる。特に本市としては、①取り組みに対する意識の向上 ②論理的思考力の育成 ③学力の定着・向上 にポイントを置きたい

【教育の現状と課題について】

- ・教育の現状と課題について、「きめ細かな指導対応（不登校児童生徒を出さない対策）」は特に重要な課題。複合的な要因のためアプローチは難しいが、何か策を考えていきたい。
- ・学力定着・向上に向けては、学習・道徳性・意欲の3つからアプローチしたい。

【学習指導要領の改訂について】

〈石黒教育長〉

- ・2020 年から学習指導要領が改訂され、「子どもたちが学ぶ」ということが大きく変わってくる。学ぶための環境づくりが教育委員会としての大きなポイント。
- ・いかに自分のキャリアを見つめ、創るかが大切。ボランティアを通して価値のあるものを子どもたち自身が見つけるような教育も重要。

【意見等】

〈北村委員〉

- ・データは、見方や分析の仕方次第で違った捉え方になるので、様々な検討が必要。
- ・これからの教育は「接続」という言葉がキーワード。幼稚園から大学、そして社会にどう繋がっていくのか、また、グローバル社会とどう繋がっていくのかが主要なポイント。
- ・一番の懸念は意欲。リーダーになりたい人がいないと様々な組織の停滞を招く。

〈吉原委員〉

- ・子どもたちに対する教育については分かったが、先生の働き方改革については別途具体的に考えていくという解釈でよいか。

〈石黒教育長〉

- ・働き方改革については、別の資料で説明していく。
- ・具体的には、部活動の短縮、委員会の統合、業務効率化のための職場の整理整頓など、時間短縮に向け様々な方法を試行錯誤している。

〈中惣委員〉

- ・若い先生が増えている一方、保護者の立場からは、未婚の先生のため保護者の視点が分からないのではという不安要素もある。その点で、保護者の視点について、ベテランの先生からの引き継ぎが大切。
- ・スマホ・SNS の普及により顔を合わせ向かって話す機会が減り、コミュニケーション能力の低下に繋がっているのでは。学校において正しいスマホ・SNS の利用法を教えていくことが重要。

〈事務局〉

- ・ネットなど閉じた世界が多く、心を開いて話す機会が減少している。

〈石黒教育長〉

- ・コミュニケーション能力は2通りある。1つは、自分から一方的に発信するもの。もう1つは相手の気持ちを大切にすること。日本人は前者が弱い。
- ・より良い関係を築けるコミュニケーション能力を習得することが必要。

〈勝木委員〉

- ・学力は高い方が良い一方、それを求めすぎてコミュニケーション能力が疎かになることは問題。学力は高いものの社会貢献しない人もいる。
- ・コミュニケーション、リーダーシップをとれる子の育成も大切。
- ・不登校に関しては、人間関係以外にも家庭の事情で生活リズムが合わないなど子ども当人の問題でない場合もある。多様な事情、要因があることを念頭に置く必要。

〈議長〉

- ・義務教育としてやらなければならないことを絞っていかなければいけない。
- ・アベレージより下にいる子に対して、どうケアしていくか、どういう体制をとるかが大事。現在、各教室に補助員を120名程度配置しており、7～8年で4～5倍に。
- ・幼児教育も大事であり、接続ということも常に考えなければならない。本市では発達障害に対し、支援センターを設置し、小～高校・社会へ切れ目なくバトンを繋いでいる。
- ・家族一体でどうやって身内を育てていくかを考えなければならない。地域だけでなく、国全体で取り組まなければならない。
- ・日本は、企業・団体の中での教育はしっかりしているが、一方でこれにあてはまらない人もいる。千差万別の人間社会をひとくくりにするのは困難。

〈北村委員〉

- ・松東みどり学園は再来年には義務教育学校となる予定。各校に波及していくモデルとなる学校であるが、それについてあまり発信されていない。

- ・学校の学びも全て主体的なもの。高等学校では交通安全活動を通し、生徒が生徒を指導しており、そういった活動が大事。
- ・学校以外で学ぶことも大事。豊かな文化・地域・伝統から様々なことを体験し、人としての器を大きくすることも大切。
- ・教育目標の設定をしているが、それを検証して教育設計をしているかが重要。

<議長>

- ・松東みどり学園について、義務教育学校として小中一貫となる時は、さらに強力な布陣となることを期待。

<北村委員>

- ・義務教育学校については趣旨を理解して入ってきてもらうことが大切。

<吉原委員>

- ・全体的な意見として、変わっていくことに対処していくことも必要であり、逆に変えてはいけないこともある。学ぶ心・人を思いやる心を大切にしようという意識が感じられて、方針としては良い。

<中惣委員>

- ・労働時間の短縮により、現場の教員が子どもたちに余裕をもって接することができるようにしてほしい。不登校やいじめ問題についても、現場の教員が目向けられるような環境を。

<勝木委員>

- ・教育の現場に関して、英語授業やPC操作など、ベテランと呼ばれる世代の先生方も学ばなければならない場面が増加。また、部活などの課外活動で結果が求められることも増加。そのような中、効率化を図り、子どもたちをどのように教育するかが大切。

<議長>

- ・この10年間で本市の教育レベルや学校環境は高まった。
- ・その1つとして、子どもたち自身が卒業式を大きな節目だと感じている点があげられる。これは義務教育の終着点。
- ・新しい元号を明るい気持ちで迎え、色々なことに取り組んでいきたい。

<北村委員>

- ・今年は未来の幕開け。地域の方々や保護者に対し、具体的なアクションによって期待に応えて欲しい。

<石黒教育長>

- ・人が育つゴールは一緒だが、ゴールにどう到達するかが大事なポイント。本市には125名のサポーターが各学校で対応している。

- ・環境面では、PC や様々な機械が入っており、学習しやすい状況。
- ・学校自身がチャレンジをしなければならない。社会の変化を見て、それを糧として教育自体を変えていく必要がある。

<議長>

- ・教育設計について 100%の完成形はないと思うが、皆さんの意見を入れて、また見直しをし、各学校に通知することとしたい。
- ・幼児教育がほぼ義務教育化され、高等教育も無償化（義務教育化）する。そういった意味で、教育の接続性が大変重要。そのことが地域力の差になる。

○閉 会